■補足説明資料

|  |  |
| --- | --- |
| 氏名（所属） | 早川崇（清水建設技術研究所）　Email:takashi.hayakawa@shimz.co.jp Tel:03-3820-6542 |
| (1)計算モデル | ・N41,N42 |
| (2)用いた手法ソフト名・作成者 | ・三次元差分法・Dr A.Pitarkaが作成したコードを自社で並列化．  |
| (3)参考文献 | ・Arben Pitarka(1999). 3D Elastic Finite-Difference Modeling of Seismic Motion Using Staggered Grids with Nonuniform Spacing, BSSA Vol.89, No.1, pp.54-68 |
| (4)有効振動数と時間刻み | ・有効振動数0～2.5 Hz・計算した時間刻みは0.0025sで，4ステップ間隔で出力し0.01sのデータを作成 |
| (5)メッシュ・要素の切り方 | ・グリッド間隔：N41，N42 は同一グリッドで，グリッド間隔はXY方向50m，Z は0m（地表）～2km間50m，2～19km間100mとした．・モデル化した領域：　XY方向は-17km≦X≦17，-17≦Y≦17　Z方向はZ≦19km・格子または要素の切れ目の入れ方： N41，N42とも地層境界面のグリッドには上層の物性を付与 |
| (6)境界の処理 | ・スポンジゾーンと無反射境界(A1 boundary)（Clayton and Engquist(1977)）・配置状況　スポンジゾーンはN41，N42とも地表を除く全外周面に2km幅で設置した．スポンジゾーン内はQ＝25として地震波を減衰させた． |
| (7)点震源のモデル化 | ・震源：A. Pitarka(1999)の方法・N41,N42ともモーメントテンソルに対応した応力のグリッドで，震源から最も近い半グリッド離れた4つのグリッドに応力ステップとして入力．平均するとモーメント中心は震源位置となる．・震源時間関数は三角形近似を行った．幅0.1sの三角形を0.05sずらしながら40個の三角形で近似 |
| (8)面震源のモデル化 |  |
| (9)減衰の導入法 | ・周波数比例のQ（=Q0\*f/f0）（R. W. Graves (1996）） |
| (10)提出波形に施した波形処理 | ・震源時間関数および計算波に対してフィルター処理を行っていない． |
| (11)その他 |  |